
SEED GEASS

魔蘿姫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEED GEASS

【Nコード】

N8598E

【作者名】

魔蘿姫

【あらすじ】

コードギアスの世界にキラとラクスが入り、世界と己の信じる信念をぶつけあい戦争根絶に生きる。尚、お気付きの点がございましたら是非、評価のところで伝えて貰えれば、ありがたいです。

第一話 夢の中の天使と女神（前書き）

種キャラの眩き

第一話 夢の中の天使と女神

思考の小波せうなみの中、ぼんやりとした意識でキラ・ヤマトは目を覚ました。

真っ白な空間が広がりそこへポツンと立っている。

キラは見たこともない景色に戸惑いを込め、呟く。

「ここは……夢？」

ギルバート・デュランダルとの決戦を終え、デュランダル派の国をラクス・クライン、カガリ・ユラ・アスハ、アスラン・ザラと共に回り、和平に尽している最中である。

とは言うもののラクスらが赴く必要が無いほど沈静化されつつあるのは余談である。

キラは感触を確かめるように床を触る。キラが触れた瞬間、床に水を弾いたかのような波紋が広がった。その波紋は広がり続け、景色を一変させた。

キラは不思議な感触と景色の豹変に困惑をあらわにする。

美しいまでに広がる、エメラルドグリーン。

広大な草原への変化。

キラの思考が着いてこれるはずもなく、呆然と草原を眺める。

そんなキラに聞き慣れた優しいがかけられる。

「キラ」

「ラ…ラクス!？」

キラが振り返るといつも隣にいた少女、いや最早、女性と呼ぶべき聡明で温かな存在がいた。

ラクスはいつもと変わらず、温かな笑みをキラに向ける。

ラクスがキラに近付くと悲しげに胸に顔をうずめた。キラは驚いたが微かに震えるラクスの肩を見て、優しく抱き締めた。

しばらくしてラクスが胸から顔を離すとキラはラクスに問いかける。

「ラクスどうしたの？」

「……わたくしはキラが此处へ訪れるまで、此处へ沈む記憶を見ました……」

「記憶…?」

キラが聞くとラクスは近くに建っている小さな石柱に手をかざす。かざすと同時に空を埋め尽すほどの哀しき世界が現れた。

子供が泣き続ける

人々は逃げ惑う

人々は立ち向かう

人々は虐げられる

勝者は人々を省ない

戦争の歴史が永遠に回想され続ける草原。

それは嫌になるほど、静かだった。

キラはかざし続けるラクスの手を壊れ物を扱うかのように優しく外した。

映像が消えても草原は静かだった。

しばらく間を置いて、ラクスはキラに決意の眼差しを送る。

「この先に二つの扉がありました。きっと」

「行こう。ラクス、君が思う方へ」

ラクスは察してくれたキラに感謝しながら二つの扉の前に立った。

右の扉には 平和

左の扉には 混沌

と書かれ、開けられる時を待っていた。

ラクスは迷うそぶりを見せず、混沌の扉のドアノブに手をかけ、止まった。

「キラ、わたくしは此所が夢であっても、現実であっても、きっと必要とされたから此所にいるのだと思います。ですから……」

「僕は君と歩む、どんな場所でも、どんな時でも」

「……ありがとうございます。キラ」

ラクスが扉を開くと同時に光に二人は包まれた。

無重力感が体を支配する中、キラとラクスは手を取り合った。

地面の感覚が戻る。

喧騒の音とビル建造物が広がった。

キラとラクスは街の真ん中に立っていた。

「ここは？」

キラはラクスの手を握ったまま、周りを見渡す。ラクスは未だ繋いだ手に安心感を覚えながら、気付いた一つの液晶パネルを指差した。

「キラ、あちらを」

液晶パネルに映る白髪の男、シャルル・ジ・ブリタニアは高らかに宣言した。

『戦い、争い、その先にこそ真に強大な国家の礎は築かれる！ 支配されるな。支配せよ！』

白髪の男はとてつもない威厳を発しながら、手を天へと突き出した。

『勝利は最早、我、眼前にある。オールハイル・ブリタニア！！』
シャルルの声に呼応するように周りの兵士も声を張り上げる。

「ラクス、これは……」

「ええ、キラ。此処はわたくしたちが知らない世界のようにです」

ラクスはキラに確信した声で告げた。

、

第二話 天使と魔女

キラとラクスは見上げていたパネルから視線を外すが、やっと自分達の異変に気付いた。

二人の身長が並んでいた。

いや、それだけではない。二人の容姿は、まるで十歳程にしか見えない。

「ラクス」

「キラ」

キラは驚愕したがラクスはキラの姿に頬を緩めた。

「キラ、可愛らしいですわ」

「ラクス……」

キラは相変わらずのラクスに肩を落としたが、同時にいつもと変わらないラクスに安心した。

「でも困ったね。これじゃあ、どこにも雇って貰えないよ」

「キラ、ポケットにIDカードの様なものが……」

ラクスが言った通り、ポケットにはIDカードが入っていた。カー

ドには、キラたちの名前が銘記されていた。

しかし、カードを持っていたとしても体は十歳のキラたちには世間は厳しい気がした。

どうしたものか。と考えていると道路を軍の車が通っていく。

キラはひらめくとラクスに少し悲しげに告げる。

「ラクス、僕は軍に入ろうと思うんだ」

「ですが、キラ……」

ラクスは軍に入ること世界情勢等を知ることができるなど、合理的であると分かっていた。しかし、愛する人を死地においやり、傷付けるのが恐かった。

しかし、口をつぐんだラクスにキラは優しく笑顔で抱きしめた。

ラクスはキラを抱きしめ返した。

ペンドラゴン、ブリタニア帝国軍基地にキラとラクスは訪れた。

彼らの姿は明らかに浮いていた。

試験官は困惑の表情で少年を見ていた。

突然、現れ軍に入団したいと言った少年に何度、大笑いしたもののIDカードを見ても十歳そこそこである。

しかし、彼の眼は今までの入団者と違っていた。瞳にとてつもない力を感じたのだ。

試験官は、ほんの、本当にほんの少しの冗談で彼に入団試験を受けさせた。シャルル・ジ・ブリタニアの方針上、軍への入団は比較的に受付は簡単になっていた。重点的実力主義、この試験官もこの制度には賛成していた。

それ故にキラは助かったと言っていい。

本来なら相手にもされず終わっていたかもしれないのだから。

試験官は驚愕に目を瞬かせた。

初めはキラも本来の体と今の体のギャップに苦しんだか、さすがはスーパーコーディネ이터と言うべきか、凄まじい運動能力を見せ、初めは当たらなかった射撃は後半は中心にしか当たらないという、はなれ技まで披露した。他の試験も試験官が驚愕している中、難無くクリアしていき、最終的にはオール特A評価。もちろん、年齢的にはアウトである。

しかし、誰の目にも逸材であるのは確かであった。

試験官は少年と少年が連れてきた少女を前にして難しい顔をしていた。

「君は確かに逸材だった。更に人格面、精神面共に適性だ。しかし、入団するにはやはり早い気がする。軍は命を取り合うところだ。そこに年齢は関係はない。だからこそ、もう一度……」

「ありがとうございます。でも、僕は今できることをやりたいんです」

少年らしからぬ、眼力で試験官を見つめ返した少年に試験官は一度溜め息をつき、少年の頭を乱暴に撫でサインを書いた書類を渡し、キラとラクスに笑いかけた。

「負けんなよ！坊主。お嬢ちゃん、コイツはいいオトコになるぜ！」

「はい！」

ラクスも笑顔で返した。

キラは本部へ書類を渡し、一時的に寮へ入ることとなった。兄妹に勘違いされたのか、ラクスも同じ部屋に住ませて貰えた。

十歳が軍の試験に合格したことは、その日の内に広まったのをキラとラクスは知らない。

翌日、キラは新人として軍の訓練に混ざっていた。他人からの好奇の目を既にキラは気にしなくなっていた。

午後から、自在戦闘走行機ナイトメアフレームの演習となっていた。

キラは運が良いと他の皆が言った。

なぜならナイトメアフレームは今では試作段階から実戦配備段階まで進み、次に予想される日本との戦闘で投入されると言われている程の最新鋭機である。

キラはそれを入団初日に触ることが出来たのだから羨ましがられるのは当然であった。

マニュアルを読んだキラはガンダムとは少し違った操作方を頭に入れながらナイトメアに機乗する。

システムを起動させ、キラはシステムをチェックしていく。知らない

い間にキラの手はOSを書き換えていく。

キラは教官からの応答があるまでいじり続けた。後にこれがもとである人物と知り合いとなることは知るよしも無かった。

教官の指令通りに並ぶ、グラスゴー。ぶこつな機械人形はランドスピナーがなければ的にかなりえないほど愚鈍だ。

並ぶことにもそれは影響し、ゆったりとした動きで並んでいく。

しかし、キラのグラスゴーだけは滑らかに並んだ。教官が気付かなかったのは幸運だっただろう。

教官から全員に通信が入る。

『今日はお前たちに実戦的練習をしてもらったためにコーネリア皇女殿下に来ていただいている』

「コ、コーネリア様だって。どうしよう私、緊張してきちゃったよ」

「わ、私も」

『言っておくがコーネリア皇女殿下は本気でこられる。少しは相手になるように尽力せよ!』

《イエス！マイロード！》

全員の声が響くと同時に演習場にグラスゴーが一体入ってくる。

他と細部は違うグラスゴーそれこそコーネリアの専用機である証で

あつた。

『知つての通りだ。さあ尋常に来い！』

「は、はい」

高圧的な女性の威厳に慌てた初めの右のグラスゴーは構えたコーネリアのグラスゴーに突っ込んでいく。

『愚か者が！』

怒声とスラッシュハーケンを発射され避けきれず頭部のメインカメラと右足を吹き飛ばされ崩れ落ちた。

そして、左隅に並んでいたキラの順番へ回ってくるまで、誰一人コーネリアのグラスゴーに触れることも傷付ける事もできず、戦闘不能へと追いこまれていた。

『貴様で最後か。まったく今年は不作だな！』

コーネリアのこのセリフは後で誤りであつたと知る。

初めて攻めに徹したコーネリアは近づくとスラッシュハーケンでいつものようにランドスピナーとメインカメラを狙う、がコーネリアのスラッシュハーケンをキラは自分のスラッシュハーケンで弾く。それと同時に安全性を考慮したマシンガンでコーネリアの腕を狙うが避けられる。

コーネリアはグラスゴーの中で感嘆の声を溢した。

『ほお、ハーケンの軌道を読んだか。ならば!』

「くっ! (体の反応速度に機体が着いてこない!)」

自分の思う通りに動かないグラスゴーに悪戦苦闘しながら、コーネリアが繰り出すスタントンファアを避ける。ギリギリをみきるキラにコーネリアは狂喜の笑みを浮かべる。

『貴様、名をなんという』

「え?……キラ・ヤマトです」

『キラ……か。覚えておこう』

再びスタントンファアを振るい、キラを攻めようとするコーネリアにキラもスタントンファアで応戦する。

スタントンファア同士が、ぶつかりスパークを起こしながら何度も両方の機体をかする。

試合はエナジー切れをコーネリアの機体が起こし、終了した。

キラは他の軍人たちに撫でられ誉められた。

こうして、キラは名が広まっていく。

同時にラクスがある一步を踏み出していた。

「君、可愛いね。テレビ出てみないかい？」

、

第三話 電子に舞う天使

ラクス・クラインは大きな歓声の中、ステージへと踊りでた。

ラクス・クライン

彼女がメディアに出始めて、まだ二週間。

しかし、すでに彼女は時の人である。

当然と言えば、当然である。歌に秀でたコーディネイターである彼女の歌に誰しもが感嘆を溢すのだから。

大通りで彼女の歌が流れれば、交通が麻痺し店に並べば完売。

彼女のデビュー曲

『静かな夜に』

は、初登場オリコン一位を獲得した。

しかし、この曲、発売は後二週間も先になっていた。

テレビで彼女が歌うと問い合わせが殺到した。その勢いで発売は急がれたのだ。

それに加え、スタッフ、プロデューサーを驚かせたのは弱冠十歳にして書いたとは思えない歌詞を書いたのだ。(とは言っても中身は一国家をまとめていた様な賢人であり、完成された歌を書いただけだが)

彼女はすでにアイドルであった。

それに対し、キラは中々厄介な事に巻き込まれようとしていた。

ロイド・アスプルンドはチェックに出されたグラスゴーのコンソールパネルを覗き見ながら、眉根を寄せた。
その様子にセシルが気付く。

「どうしたんですか？ロイドさん」

「うん。このナイトメアだけ動かし難いって苦情が来てさ、今見てただけだね。変なんだよ、ここがね」

ロイドはそう言い、パネルの一ヶ所を指す。セシルもそこを覗き込む。と、こちらにもロイド同様、眉根を寄せた。

「OSですよ？」

セシルがそう訪ねたのも無理はない。OSのスペックが違うのだ。

「誰だろね。この構成。ラクシャータじゃなさそうだし」

「それ以前に見たことがないですよ。このOSのプログラム」

「だとしたらこれを使用した兵士の誰かってことだよね？」

セシルはリストを出すと調べ始める。

「この二週間の内に使用したのは……演習の時だけのようですね。でも、ロイドさん。演習生って数十人いるんですよ。それから絞るとしても、見付かるか、どうか……」

セシルが途方もないと言いたげにリストを下ろす。しかし、ロイドは薄気味悪く笑うとセシルに言う。

「なら、彼じゃないかな？」

「彼？」

セシルはロイドが言うことが分からず、聞き返した。

キラはラク스가出演するテレビを見ていると、教官が渋い顔をしてキラを呼んだ。

「……すまないキラ君。今から特別派遣嚮導技術部に行ってくれないか？」

「え？技術部にですか？なぜ、僕が…」

「キラ君、私を助けると思って頼まれてくれないか！？頼む！」

キラはそう言われると断ることができず了解した。

「お、めでとう！」

「ロイドさん！」

キラが嚮導技術部に入ると派手なクラッカーの音が鼓膜を叩いた。セシルはイタズラをしたロイドを叱咤するが特に効いた様子もなくキラを見る。
まんべんなく

困り顔をしたキラにセシルは安心させようと自己紹介をする。

「私はセシル・クルーミー。で、こちらが…」

「ロイド・アスプルンド。ヨロシクね、ヤマト一等兵」

「えっと……なぜ僕はここへ呼ばれたんでしょうか？」

キラはより困惑した様子で二人を見るとロイドはまったく空気を読まないでキラの背を押し、ナイトメアのコックピット型の椅子に座らせると横にあるスイッチを押す。

すると椅子はコックピットの中に吸い込まれ起動し始める。

ロイドは確認すると反対側のコントロールパネルに色々と打ち込み始める。ロイドの早技に置いていかれていたセシルもキラも現状に気付き驚きをあらわにする。

「ちょ……ちよつとロイドさん！」

「いや、彼のデータ取つときたくて」

「しかし、それでもこれは……」

「キラ一等兵？」

セシルを無視しロイドは何がなんだか、わからないキラにこのプログラムの概要を説明する。簡潔に。

「君の右に説明書が挟まってるからそれ見て」

『あ、はい。ありました。…グラスゴーとは違ってますね』

「それじゃあゴー」

『え、ちょっと……』

キラの叫びも虚しく、ロイド製のシミュレーションプログラムが始動した。

十段階レベルの七

画面にsevenの文字が現れ、秒読みが開始される。わけがわからないキラは一応操作を確認する。

（やっぱりグラスゴーとは操作が違う）

画面に0の文字が浮かぶと目の前に突然、グラスゴーの十機ほどの軍団が現れ、開始と同時に初期装備のマシンガンを一斉に乱射する。

グラスゴーならば避けることが不可能な弾丸の雨。しかし、シミュレーションの使用機は凄まじいスペックを発揮した。

キラの超人的操作にプログラムがついてくる。第一波の銃弾の雨を軽々と避けたキラは、まるで長年を共に過ごしたフリーダムと駆けているような感覚を感じ、操作にキレを産み出していく。

（これなら！）

3、3、4と横に並んだ機体にキラは素早く左から回り込む、市街地の設定であったのが、こうをそうしキラは縦一列に並んだグラスゴーにスラッシュハーケンを二つ飛ばし、一気に六機を戦闘不能

に陥らせ、残り四機に肉薄する。キラは機体に付いていた剣（後に知ることとなるMVSである）を抜くと機体のスペックにものを言わせた恐るべきスピードで四機の間を駆け抜け、目にも止まらぬ早技で四機のメインカメラと足を破壊し、戦闘不能にする。

（機体がついてくる）

画面にe i g h tの文字が浮かぶ。

コントロールパネルの前でセシルは驚愕していた。

（初めてのはずなのにレベルs e v e nをたったの二十秒）

ロイドは興味深げにキラが操るロイドの目標機の姿を見る。

（予想以上だね。シュナイゼル閣下に聞いた時はあんまり関心なかったけど、持つべきものは第二皇子様だね）

そんなことを考えている二人の後ろでドア開き、気だるそうに一人の女性が入ってくる。

ラクシャータ・チャウラーである。

すぐにラクシャータはセシルとロイドに気付き、そして彼女たちが見ているパネルに視線を移す。

さすがのラクシャータも驚愕の表情を浮かべる。

シミュレーションプログラムの画面にnineの文字が光っていた。
皇帝直属のナイトオブ라운ズでさえ、nineは手一杯であると言っのにそれを…

画面の中でキラが操る機体は全包围から放たれる銃撃を鮮やかに、かわしながら次々にグラスゴーを倒していく。

三十体ほど、キラが倒すとグラスゴーが消えていく。

続けてtenの文字が浮かんだ。

ラクシャータとセシルがロイドに驚愕の表情を向ける。

当たり前である前人未到のレベルten、それすら行けたものは只の一度もない。

しかし、ラクシャータは笑い、コントロールパネルの前まできた。

「誰なんだい？あれに乗ってんのは」

「キラ・ヤマト一等兵」

「ああ、天才君」

「え、知ってたんですか？」

ラクシャータが知っていたことに驚くセシルにラクシャータは笑って答える。

「噂でちよ〜つとだけよ」

ラクシャータは再度画面にまた目を向ける。

キラは自分と戦っていた。

今までのキラの動き、癖、反応速度。全てを解析し、できたプロگرامとキラは戦っている。

故に、キラが行動する瞬間一手先に敵は攻撃し、先手を潰し、反撃も潰す。

自分以上の敵との戦いの為のステージなのである。

キラが放ったスラッシュハーケンをかわした漆黒の機体は中ばから剣でハーケンのワイヤーを切断する。キラはすぐさまマシンガンを放ち、剣を持たない左腕を狙うが読んでいたのか、右の廃ビル群に消える。

キラも漆黒の機体を追って走り、二つの同型機が向かい合うように止まる。漆黒の機体はキラに斬りかかり、キラも剣を抜き放ち、二つの剣がぶつかり合う。

「くっ！（距離を取ればスラッシュハーケンを失った僕が不利。なら、近距離で！）」

キラは敵の剣を弾くと回りこみ死角から剣を振り抜く。普通の相手なら確実にメインカメラを失っていただろう。

しかし、敵は頭を僅かに下げるだけでそれを避け振り向き様にコックピットを狙う。

キラの動体視力はその軌道を見きっているが操作が間に合わない。

（く、こっで…）

キラの思考で何かが弾けた……

「こ、これは！」

驚愕したセシルとラクシャータの隣でロイドは嬉しそうに笑っていた。

画面に映されたclearの文字が踊った。

、

第四話 魔神 騎士 天使

キラは冴えた感覚が元に戻るとともに、視界に心配そうに覗き込むセシルが映る。

シミュレーションプログラムは終わっていたようで、ロイドと褐色の女性が念入りにコンピュータに何かを打ち込んでいるのを見付ける。

ロイドと褐色の女性、ラクシャータが協同して物事を行うことは非常に稀であることをセシルしか知らない。

一段落したらしく、ロイドが近づいてくる。

「いやゝゴクロウサマゝ。興味深かったよ」

「ロイドさん！まずは謝って下さい！」

「いえ、いいんですよ」

ごめんなさいね。と申し訳なさそうなセシルにキラはいえいえ、と笑顔で返した。

反省の色が無いロイドは相変わらずの満面の笑みで笑う、と紙の束

をキラへ渡す。

「はい、これにサインね」

「何ですか？これ」

キラは渡された紙の束に首を傾げ、ロイドのにやけ面を見る。

「うちのデヴァイサー申請書」

「デヴァイサー？」

「ナイトメアフレーム（KMF）の専属搭乗者と言っべきかもしれないわね」

「それを僕が？」

聞き返すキラにロイドは当然と言つように頷き返した。

「もっちゃん」

ラクス・クラインは三週間ぶりにキラの所へ帰ってきたのだが、ド
ップリと寝入っているキラにラクスは驚いた。キラが寝入っている
ベットに近づいたラクスはやわらかく微笑み、キラの隣に座り……

「きつと幸ある未来を一緒に……」

ラクスは握ったキラの手を胸に抱き、キラの隣に眠った。

翌日、キラは赤くなって慌てふためくことになるのはラクスしか知
らない。

キラはデヴァイサーとして、ラクスはアイドルとして二ヶ月が早く
も過ぎようとしていた時、昨今からの噂通り日本とブリタニアの関
係は戦争状態へと移行した。

理由は主に戦略物質である。低エネルギー高出力を実現し、多くの
機器に必要な不可欠となったサクラダイトの大多数を産出、支配して
いる日本との経済制裁解除交渉が決裂したことが決定打となったよ
うだ。

もちろん、キラも出撃命令を受け、日本にいた。

シュナイゼル直属の特別派遣嚮導技術部は、重要拠点、枢木ゲンプ

の実家へと侵攻した。

しかし、キラたちが出撃するより先に一ヶ月という短い期間で戦争は終了、ブリタニアは勝利した。

KMFの出番がないと聞いたロイドの顔は非常に不満そうだった。隣で固く拳を握り恐い笑顔をしたセシルがいるのが少し哀れであるが。

やることのないキラは残骸の転がる海岸線を歩いていた。

所々から臭う死臭にキラは顔を眉根を寄せた。

「僕はなんのためにこの世界にいるんだろう」

キラは自分の無力さを嘆く。

トボトボと歩くキラの目に茶髪で胴着に紺の袴をはいた少年と黒髪でブリタニア特有の顔立ちをした少年が入った。いや、彼らだけでなく少し離れて波に当たらないように車椅子のブロンド髪の少女がいた。

遠目にも彼らの幼さがわかる、十代ほどだ。

彼らは悲しげに別れを告げているようだった。

「俺とナナリーは名を捨て、アッシュフォード家の庇護を受ける。それでな……もし、お前がよければ……」

黒髪の少年が言わんとすることがわかったのか、茶髪の少年は首を横に振った。

黒髪の少年は残念そうに視線を落とした。

茶髪の少年は黒髪の少年にそんな悲しみを吹き飛ばすように無邪気に笑う。

「ルルーシュ、釣りの約束忘れるなよ」

黒髪の少年も茶髪の少年が言わんとすることがわかり、笑顔が溢れた。後ろの少女も笑みを作った。

そこで初めてキラは彼女が盲目であることがわかった。常に閉じられた瞳がそう主張している。

この時、キラは運命に導かれたのだろうか。

彼らとの出会いがキラに、世界に、大きな衝撃を与えるのだから。

黒髪の少年、ルルーシュが帰ろうと踵を返した時、視界にはない存在がいた。背は小さいが軍服に身を包んだ男がこちらを見ている。

一瞬で考えをめぐらせたルルーシュは親友たる茶髪の少年、枢木スザクに鋭く声を発する。

「っ！スザク！」

鋭い声にスザクもキラの存在に気がつく。

ルルーシュはよく分からずにオロオロしているブロンド髪の少女、ナナリーの車椅子を押し、逃げようとしたが砂場に足を取られ、中々前に進まない。

スザクはルルーシュがそうしている間にキラとの距離を縮め、蹴りを放った。

キラはスザクの蹴りに合わせていなし、そのまま足下を刈り、砂場に叩きつけた。すぐさま取り抑えられたスザクは悔しげに悪態を着いた。キラは無意識に少年を組み出したことに罪悪感を覚えつつ、なぜ突然襲いかかったのか、聞こうとスザクを押さえ付けたまま、ルルーシュに叫んだ。

「どうして逃げるんですか!？」

「……………」

沈黙を守るルルーシュにキラはどうすれば、いいのかわからなかった。

第五話 天騎士始動

硬直状態を破ったのは低い男の声だった。

「どうかなさりましたか!？」

ルルーシュの声を聞き付けた黒服の男がとび出して来たのだがキラと睨み合った瞬間、キラと黒服の殺気は消えた。

むしろ、困惑が広がった。何故なら二人は初対面ではないからだ。

「何故貴方が？」

「何故キラ君が？」

黒服の男はブリタニア本土でアッシュフォード家の警護にあたっていた。その当時、ある理由でラクスとキラはアッシュフォード家に

訪れ、その時に知り合ったのだ。

黒服の男は今は日本へ来たアッシュフォード家に遣えている。

ルルーシュに保護の申し出に訪れたのもこの男であった。

キラは男にルルーシュとナナリーの経緯を聞き、疑問が解決された。皇族であるルルーシュとナナリーは今では暗殺の対象とされている可能性があるのだそうだ。

故にキラに、いや、正確には軍服を着た人間に過剰に反応したのだろう。

男が願うまでもなく、キラはこの事を胸に秘めることにした。

改めてキラは彼らを見た。

茶髪の少年、枢木スザク

黒髪の少年、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

ブロンド髪の少女、ナナリー・ヴィ・ブリタニア

まだ幼い彼らにはそれぞれ苦難がかかっている。

一人は父が死に明日が見えず

二人は命が狙われ、明日が見えず

彼らに何かをしたいが出来ることがない無力な自分に、またもはがみした。

黒服の男になだめられたルルーシュであつたが納得がいけない様子でキラを睨み続けている。どうすることも出来ないキラは悲しくなった。

黒服の男に促され消えていく彼らの後ろ姿をキラは見送るしかなかった。

軍に戻ったキラはブリタニアに戻り、思いを叶える力を求め続けた。そう何かに急ぎ立てられるように、幾多の出会いがありながら、力を求めた。

ブリタニアの先駆けに会い、ラクスで紹介でユーフェミア皇女殿下（その呼び方は止めて、と言われた）に会い、平和を望む幾多の人々、同志と出会い、それでも足りない力を求めた。

そして……

ロイドは造り上げられていくKMFを見上げながら、隣でコンソールパネルにデータを打ち込むセシルに溜め息混じりに声を漏らした。

「これでキラ君はウチのデヴァイサーじゃなくなっちゃうね」

「ロイドさん、部下の昇進を喜ぶのも上司の勤めです」

とセシルにたしなめられたロイドだがニッコリ笑ってセシルに聞き返す。

「ボクが理想的な上司に見える？」

セシルはあらためてKMFバカである伯爵に溜め息をついたが、自分も感じる寂しさを否定することは出来なかった。

そして、明日にはあの少年はナイトオブブラウنزとなる。

入隊二年の快拳であった。

正装を整えたキラは緊張した面持ちで鏡とにらめっこをし、顔の筋肉をやわらげ、右手にある携帯電話のラクスからのメールを見て、微笑むと気合いを入れ振り返り……コーネリアとブリタニアの先駆けこと、ギルフォード更にユーフェミアが立っていた。

「早いものだな、ヤマト」

「我々と出会い二年でよくナイトオブブラウンズまで……いや、君だからだろうか。」

コーネリアとギルフォードがキラに祝辞を送り。ユーフェミアからは礼式用の剣を受けとる。

礼剣を腰に携え、先に会場へ向かったコーネリアたちの後を追った。

音もなく静かな中、キラは一步步真っ赤に続くカーペットを歩いていく。

横には貴族や軍部が連なっている。

はりつめた空気の中、キラが中ほどまで歩みを進めた時……

金髪の少年の笑みが溢れた。

兵士の銃口が一斉にキラに向いた。

キラの体は凄まじい反応速度で動いた。

銃口が輝いた瞬間には銃弾をかいくぐった。

しかし弾丸は両側の兵士たちを相撃ちに追いやった。

キラは呆然とし、周りの惨状をまのあたりにする。

すぐに悲鳴があがった。開場はパニック状態に陥り、コーネリアたちが先導しているが、まるで効果がない。

その中で更にキラを狙う影がいくつもあった。

キラはそれにいち早く気付くと開場から飛び出した。

キラは混乱していた。

何が起こってるんだ！？僕を狙って何かが……

思考を遮るように銃声が響く。直ぐ様、キラは逃げた。

通りすぎる兵士は全てがキラに銃を向けた。

街に逃げ込んだキラは街の路地裏に身を潜め、兵士をやり過ごした。なんとかやり過ごしたキラは安堵の溜め息を溢し、路地裏から表の兵士たちをみる。

「どうしてこんな……」

「ボクが教えてあげようか？」

突然、背後から声が聞こえ、キラは驚いて振り返るとそこには金髪の少年が立っていた。

金髪の少年は微かな笑顔を向ける。

「君を殺そうとしてるんだ。君を殺すために素晴らしい舞台を用意したつもりだったんだけど……残念ながら逃げられたから、ここで始末させてもらうよ」

銃を出し、キラに狙いを定める。

「君は……？」

「ボクはV・V。さようなら変革者キラ・ヤマト、すぐにラクス・クラインも君と同じところに行くことになる」

ラクスの名を聞いた瞬間、キラの中で何かが弾けた。V・Vの銃弾を縦横無尽に駆け抜けながら避け、基地に戻る。

キラの頭の中にはラクスを助けることしかなかった。

兵士たちの銃弾をかいくぐったキラは開発局のガレージに入り、開発途中のキラ専用機に乗り込んだ。

プロトタイプ

第七世代KMF・PTZ-00ナイトファルト

グラスゴーなどと違いより人に近いフォルムと高出力のユグドラシルドライブを兼ね備えた新世代と呼ぶべき機体となっている。しかし、残念なことに武装と言える武装は両腕に着いたスラッシュハーケン、左右の腰に着いたMVS（試作）、そして左手に内蔵されたレールガンのみである。

それでもキラは機体のプログラムを立ち上げ、チェックしていく。尋常ならざるスピードでキーボードが叩かれ、発進準備が整う。

ファクトスファイアを開き、敵の位置を補足し、ラクスがいるだろうテレビ局までの最短ルートを探る。

プログラムをインストールし終えたナイトファルトの始動キーを打ち込む。

ナイトファルトは命が吹き込まれたように目がエメラルドグリーンに輝く。

ナイトファルトは右腕を前下に左手を後ろ上に広げ、重心を前にとり肩幅より広くとった足幅で脚部のランドスピナーを展開し、地面に接地。

それと同時に最短ルートの索適終了。キラはフットペダルを力強く踏み、ランドスピナーを高速回転させた。

半分も完成していない兄弟機のランスロットの横でランドスピナーから火花を発生させながらナイトファルトは急発進した。ナイトファルトとランスロットは非常に似通っているがナイトファルトは機動性を重視してあるためにランスロットよりも鋭角的にできており抵抗を少なくしてある反面、動きすぎることに由来の動かし辛さがある。まあ、キラは克服しているので関係はないが。

ガレージの扉を左手の小型レールガンを三発撃ち込むことで破壊し、

外へと飛び出した。

アラートが鳴ったがキラは気にせず、目の前に広がった景色を駆け抜けた。

今はただ彼の信じる愛を持って

視界に出現してくる新型のサザードとグロースターを睨みつけ、キラは大切なものを守るために力を振るうことを躊躇わないことを誓った。

世界平和への旅が今、始まろうとしていた。

、

第五話 天騎士始動（後書き）

二週間に一回のペースで一杯一杯です。すみません。ですが頑張ります。とは言いますが実はこの話、3パターン考えたんですが、一つ目がブリタニアの騎士としてルルーシュに立ち塞がり…って話、と二つ目がブリタニアから出ていき中華連邦に行き、そこでカレンと出会い（カレンは一時期中華連邦にいました）日本の現状を聞き手伝い。黒の騎士団に入る…って話と、今、執筆しているこれです。これは結構、本編とは違う道に行ったりするかもしれませんが。それでも見てくださる方には感謝です！ではどうぞ！

第六話 想い旅立つ（前書き）

種キヤラのつぶやき ア「アスランと」 カ「カガリの」 共「種キヤラのつぶやきコーナー」 ア「（俺、何やってるんだろう）カガリ」 カ「何だ、アスラン？」 ア「このコーナー必要か？」 カ「暇だろ？ お前」 ア「俺は確かにアレックスとしての仕事も無いが、お前は暇じゃないだろ？（確か、今日はテレビでドレス姿のお披露目だったはずだ）」 カ「……息抜きは必要だ」 ア「どうして目をそらすんだ？ また、マーナさんやキサカ大佐を困らせてるんじゃ……」 カ「マーナには休養をやったし、キサカは出張だ」 ア「そういう問題じゃない！」

第六話 想い旅立つ

白に映える青と赤のラインが高速でグロースターとサザーランドの傍らを通り抜けた。

ナイトファルトが過ぎ去っていくと駆動系が火花を放ち、サザーランドとグロースターが四散した。

ナイトファルトは右手にMVSを持ち、次々と敵機を斬り倒していく。

驚嘆すべきは全ての機体をコックピットに傷をつけることなく破壊していることだろう。

囲まれるよりも先に敵の陣型を崩し、一気に一直線状の敵を粉碎する。

ただラクスのもとへ。

ただそれだけを思い、キラは鬼神となった。

テレビ局で銃声がなり響く。

襲いかかる銃弾に悲鳴は無かった。

ラクスは声をこらし、非常口を目指す。

テレビ局内は、これといって騒ぎとなっていなかった。収録中だった、と言う理由と目撃者は消されたからであった。

ラクスは近付いてくる足音に隠れるように近くのドアに入った。

ドアの隙間からラクスは近付く影を覗いた。

茶髪の小さな少年が不釣り合いな拳銃を握っていた。

そこに反対側の通路から運悪く警備員が近付いてくる。

ラクスは近付く警備員に叫ぶ。

「来てはいけません！」

警備員が驚いた表情を作った、その瞬間ラクスの視界に赤い波動が通り抜け

警備員は驚愕の表情で固まっていた。

「こ、これは……一体」

ラクスが振り返ると少年の幼げな顔と

不気味に赤々と輝く瞳
がラクスを射抜いていた。

少年はラクスではなく、警備員へ銃を向け、躊躇することなく撃つた。額から血を流して倒れる警備員。

「V・Vが言った通り力が効かない。危険だ、貴方は」

少年の瞳はもとの色に戻り、変わらぬ無表情で銃を向ける。少年の指がトリガーを弾く前に突然、地震が起こった。

凄まじい衝撃が少年とラクスを転倒させる。

ラクスは外を見ると巨人が窓から手を建物内へと突き刺している。優しく握られた手にラクスがおさまると手を引き抜き、走り去っていく。

少年は憎々しげに何発か銃を撃ったがKMFには意味をなさず、すぐに射ち止めた。

キラは後ろのコックピットハッチを開き、ラクスを招き入れる。

キラはラクスを抱き締め、ラクスはキラを抱き締め返した。

「よかった。ラクス、君を失うかと思ったら僕は……」

「キラ……」

キラとラクスが涙を流し、お互いの顔を見る。ラクスは安心した表情から真剣な表情へと変わり、キラも真剣な表情を浮かべる。

「キラ、スピカへ連絡を。計画を早めます」

「うん」

キラはラクスに携帯電話を渡し、ナイトファルトで近くの建物に入り、電源を落とし、ファクトスファイアの索適を逃れる。

ラクスはラクスとキラの携帯電話のみにつけられたボタンを押す。数回、呼び出し音が流れたのち繋がった。

ラクスが経緯を話すとすぐに携帯電話を閉じた。

ブリタニア軍イルゲーム管轄区、旧イルゲーム軍用庫に着いたラクスとキラは用意されていた大型トレーラーに機体をのせ、個人チャーター機がある飛行場へ向かった。

その頃丁度、ロイドが試作機が消えた格納庫で奇妙に曲がった笑顔

を浮かべていた後、昏倒したとか、いなかったとか。

風でラクスはピンクの髪をなびかせながら、キラとチャーター機へ乗り込む。

ラクスは悲しそうに遠ざかるブリタニア本土に目をやりながら漏らす。

「ユフィさんやコーネリアさんたちへお別れも言っていないせん。残念ですわ」

「……きつと」

ラクスは希望に満ちたキラの顔を見た。

「僕たちが信じる世界を求め続ければ、また会える。どんなに離れていてもどれだけの時が経とうと……きつと」

「そうですわね」

キラもラクスも今ある未来への可能性に笑った。

第七話 緑（前書き）

短いです

第七話 緑

中華連邦広東地区

トラックの中から青空が広がっている空を見ているラクス隣でキラはパソコンにデータを打ち込んでいる。

画面にはKMFが表示され、細部に装備の原理や用途が書かれている。隅にfreedomやdragonsystemの名があった。

キラが打ち込んでいるとラクスが何かに気付いたように運転手に声をかけるとトラックが停止した。

止まったトラックにキラは何かあったのかとトラックを降りていったラクスを後を追った。

キラが降りるとラクスが緑髪の少女と話していた。緑髪の少女はラクスに驚いた様子でラクスのペースにのせられ、いつの間にか、トラックに乗っていた。

キラが緑髪の少女に近付くとラクスが言う。

「C・Cさんと言うそうですね。近くの町まで連れて行ってほしいそうです」

C・Cと聞いた瞬間、V・Vといていた少年を思い出したが、考えすぎだと頭を振った。が名前の特異性が気になり聞いた。

「C・Cなんて珍しい名前だね」

緑髪の少女はとくに気を悪くした様子もなく言う。

「偽名だからな」

.....

.....

.....

「.....え？」

あっさりといわれてしまったキラは固まってしまった。

しかし、緑髪の少女はラクスと雑談を初め、結局、話は聞けなかった。

何やら意気投合した二人（C・Cがラクスを気に入ったようで先程まで二人で一緒にベットで寝ていた。ラクスの性格と雰囲気のためのものである）は次の町についても仲良く、電気充電中のトラックを置いて、変装しショッピングに出かけた。

二人の護衛には運転手が着いて行き、キラは残り、パソコンにデータを打ち込む作業に没頭した。

日が高く上った頃には、トラックはまた町を出て、次の町へ走った。結局、緑髪の少女は上海行政区を通りすぎ、日本（現在はブリタニアの植民地エリア11）まで着いてきた。

本当になつかれたラクスも友人ができたことに喜びながら、ここまで着いてきたC・Cの心配をしていた。

こんなところまで連れてきてしまつて良かったのだろうか？ と。

しかし、それは全くの杞憂であつた。

「何だ？ そんな神妙な顔をして。腹でも下したのか？」

何故だかC・Cはラクスになつくと同時にキラで遊ぶことが多くなつていた。

「いや、そういうわけじゃなくて、ただ聞きたいことが……。」

「まあ、何が言いたいかは、だいたい見当がつく」

最初からそうしてくれたら良かったのに、とキラは思ったが口には出さなかつた。

「中華連邦には知り合いを訪ねていたんだ。いなかったんだがな」

「……………」

初めてC・Cが寂しそうに笑うのを見たキラは慌て、何も言えなくなつた。

「どのみち、ここへは戻ってくる予定だつたからな」

「……………」

キラは何も言わなかつた。

C・Cと別れたラクスはNACと呼ばれているサクラダイト管理機関を訪れた。もっとも裏ではキョウトと言う名の知れたテロリスト支援機関でもある。

キラは別にアッシュフォード学園を訪れた。用件は協力体制の確認である。

この二年間水面下で

《人が人らしく生きることが出来る世界を創る》ことを理念とし、ブリタニア穏健派を取り込み、協力体制を確立させつつあつた。けつして数は多くはないがラクスもキラもこれは妥当であると分かつていた。これのパイプ役をかつて出たのがアッシュフォード家であつた。

二年前にあつた少年たちについて聞こうとしたが聞くべきではない

とかぶりを振った。

あと一つわかったことはキラは現在、ラクス・クライン誘拐の罪で搜索されていることだ。キラが命を狙われたことは揉み消されたようだ。

再会とはえてしてあっさりとしたものだ。

いや、相手は前から聞いていたのかもしれない。げんに驚いた表情もなかったのだから。

楽しそうに（ロイドの機体をいじくり回すことが出来て嬉しいのだ）ナイトファルトを分析しだす。

ラクシャータ・チャウラーとの再会は非常に味気無いものだった。

、

第八話 想い、相対的に（前書き）

一期には少ししか触れないかもしれません。ユーフェミアによるかも。ユーフェミアを生かすか、それとも原作通り殺すか、そこが別れ道ですね。意見があればお願いします

第八話 想い、相対的に

機体をインドへ送った後もキラとラクスはキョウトの保護を受けていた。

テロ活動は年々の激化の一途を辿った。

一、二年の間に中華連邦、EU、ブリタニアに協力者を探し、協力を申請するなど活動したが世界はブリタニアの支配の恐怖、利己の欲望によって硬く凝固し、世界は変革を求めることさえままならないほどに歪んでいった。

逆にブリタニアに支配された事によって、その国が安定し、貧困が緩和された例がある。

しかし、少なくともAREA11……いや、ニホンはその中に含まれない国であった。

《日本開放戦線退却しました。いかがなさりますか?》

「相手への損害は……まあまあか、まあいい退却通路へ案内しておけ」

《はっ！》

画面から報告兵が消えると老人が後ろにいたキラとラクスへ向き直った。

「そう悲しそうな顔をなさるな」

ラクスの顔が悲しみて歪んでいることに気付いた老人は慌てるでもなく穏やかになだめた。

「目を背けることはしません。わたくしは今ある現実を受け止めたいただけなのです」

「それがラクス殿が願う世界と反対のものであるからかね？」

悲しみの表情はない、あるのは年にみあわぬ貫禄。

「はい」

老人は笑った。瞳の奥に渦巻く、その人間の闇をキラとラクスは逃すことも無かった。

皇歴2017年

その年、日本に反逆者が舞い降りた。

名は

ゼロ

彼は瞬く間に大半の日本人へ希望を与えた。

しかし、言い換えるならばゼロはよりいっそう日本人へブリタニアを憎む心を深く植え付けた。

キラとラクスは当然のように肩身が狭いままで過ごしていた。

表向き保護だが、隔離に等しかった。

彼らに打ち解けることが出来たのはラクシャータと神楽耶であった。

そんな中、ゼロが作った黒の騎士団はブリタニア軍へ多大な戦果をあげていた。

最新鋭の純日本製KMF、紅蓮二式も黒の騎士団へ実戦配備され、ラクシャータも彼らの所へ派遣されていた。

季節が秋を示す肌寒さと共に、ある知らせが舞い込んだ。

「キラ様には、ゼロ様に協力していただきたいのです」

「……それは先日日本宣言を行ったあの……」

「はい。しかし、これはそれだけではないのです。ブリタニアと日本の溝は広がるばかり、あなたがたを疑う輩も少なくはありません。ですからこの事項へはキラ様の力をお貸し頂ければ、そのような輩

を沈めることができるのです」

キラはやはりか、と言う風に顔をしかめ、ラクスはキラを気遣わしげにみた後、神楽耶に向き直り、キラと同じ結論に行き着いた。

「わかりました」

九州は激しい雨と風が吹き、まるでこれからの激戦への狼煙のようである。

「機関出力最大。ブースターへエネルギー供給終了。神威発信準備完了」

神威とは素体のナイトファルトからラクシャータが造り上げた新型である。

しかし、ゼロのガウエインのようなフロートユニットはない。

だが、それでは退却は困難であるが故にラクスが秘密裏にラクシャータに情報を提供し、造り上げたバーニアスラスターを装備している。もちろん、試作型である。エネルギーはまかないきれないため退却用のバッテリーを取り付けた。

そのため、行きは潜水艦である。

ナイトファルトの形状が残った神威は右腕に輻射波動機構が備え付けられている、とはいっても紅蓮二式の様に掌から展開するわけではなく（展開は可能）、掌を介して回転刃刀へと伝達し、切味を凄まじいものとするためだ。左腕には大型の槍の形状をしたスラッシュハーケンが取り付けられ、掌には小口径電磁銃を握っている。姿も白銀に金の目立つ容姿であり、これには目立ちながらも強さを誇示できれば敵の士気を低下させることが出来るためだ。

ラクスの声が神威のモニター越しに聞こえてくる。

「必ず……必ず帰ってきてください」

キラは悲しみの浮かんでいるだろうラクスの顔を思い浮かべ、交渉に尽力していた真剣なラクスの顔を思い浮かべ、優しい笑いかけるラクスを思い浮かべ、決意のまなざしで荒れ狂う海をにらみつけた。

「ラクス……必ず、戻ってくるから、絶対に」

今は、力がある

思いもある

だから、ぼくは

「キラ・ヤマト、神威行きます」

白銀と金が空を舞った。

、

第九話 魔神と天使（前書き）

評価してくださった皆さんへの返事を書くのが遅くなり申し訳ありませんでした。マナーを守っていきます。指摘してくれた方、ありがとうございます！

第九話 魔神と天使

九州大分ブロックに降り立った神威はここでゼロからの通信が入るまで待つことになっていた。

ほどなく通信が入った。

画面に現れたのは仮面の男、ゼロ

「時間通りだ……その前にキラ・ヤマト。お前は何のためにこの戦場へ立っている？」

ラクスに通じるある種の威厳とカリスマ性を感じながら、キラは画面をにらみつけた。

「世界に人が人として生きることが出来る世界を創るために」

ゼロは鼻を鳴らし、断言する。

「そんなものは傲慢でしかない。世界を見下ろし、まるで自らが神であるかの如く世界を創造すると言うお前、なんら暴力による世界の平定を目指すブリタニアと変わらない」

「違う。ぼくらが創る世界は人が選ぶことができる世界なんだ。人は強要されるから反発する。自らの在り方は自分で決められる、人々が手を取り合える世界へ僕は、僕たちは変えていきたい」

次は切り捨てず、キラへ聞き返す。先程の刺々しさはもうなかった。

「何故、世界をそれほどに安じる？ いや、何故、ブリタニアを倒す

事を考えない。ブリタニアを倒すことで日本は解放される。それこそAREA11の、日本の悲願。キョウトに協力していれば、当然の考えだ」

仮面の男、ゼロであるルルーシュは内心で呟く。

だが、それでは何も変わらない。ブリタニアが倒れたとしても戦略物質サクラダイトをめぐり、結果日本は他国に狙われた生活を送るだろう。世界が変わらなければ、日本は真には助からない

ルルーシュにもブリタニアを倒す重要性は低いことはわかっていた。世界には分かりやすい悪が必要なのだ。人々を結束させる標^{しめし}が。ブリタニアはそれにうってつけた。しかし、そうわかつてはいても……

ルルーシュは自らの憎しみを押さえることはできなかった。

キラはいい放った。

「世界が変わらなければ、何も変わらない。だから、日本もブリタニアもEUも中華連邦もすべてが変われば世界はよい方へ進んでいくと僕は思ってる」

「君の考えはわかった。では君は南から福岡ブロックを攻めてくれ私は北東から攻める」

指令を聞くと神威はすぐさま向かっていった。

内心でルルーシュはかつて出会った事のあるキラに呟いた。

まったく、お人好しな奴だ

そう呟いたが、ルルーシュはブリタニアの軍人であつたかつてのキラが密告することなく、更にルルーシュが気付かないところで援助もしていたことを近頃知つたルルーシュはキラが信頼に値すると理解していた。

仮面を外し、頬を緩めたルルーシュに下から声がかけられる。

「言つた通り、ドが付くほどのお人好しだつただろう」

「ああ、変わらない奴だ。出会つた時もそうだった」

「ラクスの方がお人好しだがな」

ルルーシュの下の操縦席に座るＣ・Ｃからやわらかい、と言つか、ルルーシュが聞いたことがないほど優しい声が聞こえた。

ルルーシュに、むしろがはしると同時にガウエインはよんだ空へと溶けこんでいった。

第十話 過去の残像（前書き）

後書きをお読み下さい

第十話 過去の残像

雨粒が白銀のフォルムを叩き、パラパラと落ちる前に凄まじい速さをもった神威は卵型のKMFを粉碎した。

ランスロットの中で枢木スザクは、ランスロットに酷似したナイトメアに困惑の表情を浮かべていた。

ナイトファルトを知らない彼ならば仕方のない驚愕である。

しかし、彼以上に驚愕した人物がいた。

ナイトファルトの生みの親、セシルとロイドである。

画面に映りこむ、ナイトメアのフォルムを見たセシルとロイドは目を見開いた。

KMFのカラーは違うものの、自らが設計したKMFを忘れるはずもない。

同時に彼らは脳裏に一人の少年を思い出していた。

8年前に消えた少年

そして

ラクス・クライン誘拐事件の容疑者

軍事兵器強奪の国家反逆罪

汚名の限りをつけられたキラの名

しかし、信じる者もいる

キラを信じる者の中にセシルとロイドはいるのである。

セシルは通信を開き、戸惑いの声をあげる少年へ澤崎敦の確保を急がせる。

そして、自らの考えを悟られまいと言うようにすぐに通信を切った。

セシルのすぐ後ろまで歩み寄ったロイドはセシルにのみ聞こえる声でたしなめた。

「いくらなんでも不自然に思うよ。か・れ」

「……わかっています」

「そ」

ロイドは沈んだセシルの前に四角の記憶媒体を置く、これはセシルが知ったものだった。

8年前に造られ、5年前に破棄されたはずのそれをセシルは目を見開き、握る。

表面にはセシルの字で R e t u r n P r o g r a m
とある。

少年の帰還を願ったプログラム。

「いや、棄てるの忘れててね」

と言うロイドの声が聞こえていないかのようにコンピューターに記憶媒体を挿し込み、データを読み込んでいく。
セシルにはその時間すら惜しく感じてしまう。

読み込みが完了した時には、ナイトファルトの発展機は辺りの機体をほぼ壊滅させていた。

スザクからも確保完了の報告が入った。

あとはプログラムを起動させるだけ、それだけである。

働くかはわからない。しかし、起動する価値はある。

起動ボタンをゆっくりとしかし、しっかりと押した。

効果はすぐに現れた。

あらかた片付け、敗走していく卵型のKMF『ガン・ルウ』と戦闘員。

晴れ始めている空の雲に紛れて消えていく大型のKMF『ガウエイン』を確認したキラは自らのナイトメアを帰還しようと動かそうとした時、機体のモニターに《データ受信中》の文字が踊り、キラは困惑の表情を浮かべた。

すぐに《受信完了 始動》とモニターに映り……

「う、これは……！」

異変を感じたラクスの声がすぐに途絶えた。

「スザクくん、ポイントL-42Aに身元不明の機体があるの、そこへ向かってその機体を捕縛して」

《イエス・マイロード》

連絡を切ったセシルはモニターに空を見上げたまま動かなくなったKMFを映した。

「よかったね」

と言うロイドの声も今は不快では無いとセシルは感じた。

あとはあの機体が容易に捕縛できるか、だけである。

スザクは通信で送られてきた索的ポイントへたどり着いた時に息を呑んだ。

空を見上げたまま動かないKMFの姿がそこにあった。

先程の躍動が嘘のような沈黙。

自らの分身がいるかのような感覚に襲われる。

機体に近付くと、セシルの声でスザクは我にかえった。

「スザクくん、コックピットを開きます。確保をお願いします」

「は、はい！」

セシルの声と同時にコックピットが開き、茶髪の少年が姿を現した。

スザクの過去の記憶が呼びおこされる。

アヴァロンでもセシルが息を呑んでいた。

紛れもなく、そこにはかつての少年。

キラ・ヤマトがいた。

第十話 過去の残像（後書き）

ここからは2つに分断したいと思います。1つはルルーシュ、スザクと最終的に和解し、進むシードストーリー、もう1つは大体のストーリーにそって進むギアストーリーです。どうぞよろしくお願ひします。ご意見感想もよろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8598e/>

SEED GEASS

2010年10月9日13時58分発行